第四場面　七組のまとめ

「僕」は、エーミールがクジャクヤママユを持っていると知り、それが見たくてたまらなかった。だから、思わず、その気持ちを抑えきれずにエーミールの部屋に入ったが、あの有名な斑点は見ることができなかった。

坪井美澄

「僕」は、クジャクヤママユを見ることに興奮して、見られるときが待ちきれなくなり、人の家に入ることはいけないことだけど、エーミールの部屋に入り、すぐに他人の物をあさって、クジャクヤママユが見られたが、「僕」の見たかったクジャクヤママユのあの有名な斑点だけは見られなかった。

小川竜之介

まだまだちょうに対する熱情が止まることがなかった「僕」たちの中で、あのエーミールがクジャクヤママユを持っているというわさが広まった。このちょうを熱烈にほしがっていた「僕」は、もう、見られるのが待ちきれなくなり、エーミールの家の四階まで上がっていった。だれもいない彼の部屋に入り、早速クジャクヤママユのあらゆる部分を残らず間近から眺めれたと思ったら、有名な斑点だけは紙切れの下になっており、見られなかった。その時の「僕」はもう、自分の欲望に満ちた手を止めることができなくなっていた。

内木希美

「僕」は、クジャクヤママユを見たいという気持ちを抑えることができず、あのエーミールの部屋に入ってしまった。そこには、「僕」が熱烈にほしがっていたクジャクヤママユがいた。けれど、見たかった斑点は隠れ、見ることかできず、あとから後悔をするきっかけとなった。

下り藤文乃

「僕」は、エーミールがかえしたクジャクヤママユ見たさに、勝手にエーミールの部屋に入った。だが、あの有名な斑点だけは、細長い紙切れの下になっていて、見られなかった。

柴田珠里

「僕」が一番欲しかったクジャクヤママユを「僕」がとても嫌いだったエーミールがさなぎからかえしたというわさを聞いた。そして、嫌いなエーミールのところでも、クジャクヤママユが見られるのならと、だれもいないエーミールの部屋に勝手に入って、クジャクヤママユをじっくりと眺めた。だが、一番見たかったあの斑点が見られなかった。

竹中麻雄

「僕」は、エーミールの部屋に、クジャクヤママユを見るためだけに無断で入った。「僕」は、エーミールの部屋なのに、展翅板や収集のしまってある箱を、エーミールがいないのを良いことに、勝手に見た。しかし、残念ながら、有名な斑点だけは見られなかった。

植木伯臣